

ガボンの熱帯雨林における森林資源の利用に関する研究

平成 26 年入学
派遣国：ガボン共和国
小林 大輝

キーワード：森林産物、二次林、植物利用、薬用、食用

・対象とする問題の概要

熱帯雨林は二酸化炭素の吸収源として重要視されており、また、多彩な生物相を有していることで名高い。現在、熱帯雨林は伐採によって縮小しているといわれ、その結果、地球温暖化や生物多様性の低下を招くことが懸念されている。

調査地であるガボン共和国は、アフリカ大陸の低緯度地域に広がる熱帯雨林に位置している。この森林は、一見すると人間活動の影響を受けていない原生林であるように見えるが、実際には、人為的な要素を考慮に入れずに説明することが不可能な生物相によって構成されており、一種の二次林であるといわれる。また、この森林には人間にとって有用な多くの動植物が生息しており、相対的に「豊か」であることも明らかになっている。すなわちこの地域の住人は、森林との相互作用のなかで豊かな生活を享受してきたのである。

・研究目的

本研究では、植物、キノコ、獣肉、魚類、昆虫類などの森林産物を、地域住民がどのように採集・活用しているのかを調査し、長い年月を経て醸成された人間と森林との文化的・生態学的な関係を明らかにすることを目的としている。そして、貴重な熱帯雨林が減少する主たる原因である森林伐採をおこなわずとも生計を立てる術を地域住民に提案していきたいと考えている。

・フィールドワークから得られた知見について

2015 年 1 月 2 日から同年 3 月 2 日までの 60 日間、ガボン南西部のニャンガ州 M 村において調査をおこなった。この時期は小乾季の中ごろから大雨季の初期にあたる。村の周囲は河畔を除き、パラソルツリー (*Musanga* sp.) のみられる二次林が広がる。人口は 30 人ほどで、その大半はバントゥー系農耕民のプヌ人だが、周辺地域出身の諸民族もプヌ人住民と婚姻するなどして村内に居住している。主な生業は焼畑農耕であり、主食であるキャッサバやバナナに加え、トウガラシやオクラといった各種野菜が混作畑で栽培されている。商品作物の栽培はみられなかったが、農作物の住民間での売買や、通りかかりの自動車への販売といった小規模な取引は確認できた。住民の主なタンパク源は獣肉であり、銃や罠をもちいてアンテロープやヤマアラシ、オナガザルなどを補殺する。獣肉はとりわけ重要な現金収入

源でもあり、高値で取引される。

本調査では、食用・薬用とされる植物およびキノコを調べた。植物は草本 13 種、木本 69 種の計 82 種の利用を記録した。そのうち食用利用のみ確認したものは 10 種、薬用利用のみ確認したものは 65 種、食用利用・薬用利用の両方を確認したものは 7 種だった。小乾季は植物の結実期にあたり、滞在中に人びとは果実および仁を食用とするブッシュマンゴー (*Irvingia gabonensis*) の採集に余念がなかった。有用植物とその利用法の例をいくつか挙げたい。二次林に多くみられるノボタン科の 3 種ないし 4 種の低木は、いずれも *masiesi* と呼ばれ、摘みとった葉をソースの具材にする。また *musasu* と呼ばれる *Harungana madagascariensis* は、道路脇によくみられるオトギリソウ科の亜高木である。若葉をトウガラシの実と一緒にすり潰し、心臓の痛みの薬として服用する等、多数の利用法がみられた。

キノコについては、4 種ないし 6 種の食用利用を確認した。キノコの多くは、耕作地に点在する燃え残った材木より発生した木材腐朽菌であった。現地のプヌ語で「ラフィアヤシのキノコ」を意味する *bogububumbari* は、伐り倒され、朽ち果てたラフィアヤシの幹にみられるキノコの総称である。3 種がラフィアヤシの倒木上より発生しているのを確認し、うち 1 種は食用に適さないとのことだったが、いずれの種も *bogububumbari* と呼称されていた。



写真 1: 燃え残った材木から発生したキノコ



写真 2: 採集された *Irvingia gabonensis* の果実

・今後の展開・反省点

今回の調査では、食用・薬用に利用されている植物およびキノコを中心に記録した。次回の調査ではこれらに加え、物質文化にかかわる植物利用のデータも収集したい。また、次回の渡航は大乾季の半ばである 7 月中旬から小雨季である 10 月までを予定している。よって前回の調査で集めたものとは異なるデータを得られるのではないかと期待している。